



吉
田
鳥
朝
外
傳
門
號
卷
13
2945
14

昭
九
年
七
月
九
日
時
求

鎮西少郎
鳥朝外傳

椿說弓張月續編卷之二

東都曲亭主人編次

この卷ハ琉球國の開闢より。天孫氏二十五世尚寧王中山世系と傳
九四世尚永王の子と又尚寧王の在位十八年の事である。

日本近衛帝久壽す一年不當り。かれバ鳥朝十七才の
日本近衛帝久壽す一年不當り。かれバ鳥朝十七才の

ことなり。阿模の忠國が贈となりて九州を討あざへもひよ
こううづ。前後二編の文の叙述が又國のみと説きたり。さて
續編ふ至く。ゆび琉球のゆび説起も故に年序錯乱する。

小似る。閲者こじまひね次の卷も亦この例よ倣すともべし。

第三十三回毛國持が忠利勇を説破也

君眞物の神王宮不出現也

琉球國。そのはじめに天地開き。時一男一女化生して化生の父母。是則阿摩美久と稱す。傳信錄小中山世鑑を引く所云く。姓を歡斯氏名ハ渴刺瓊。玉人これを呼び可老年といひ。その妻を多拔茶といふ。又一説云。その夫があれりともいひ。その婦をあうこと。美名ハアヌ。或ハレ其國王の姓氏をこうべばとぞ。琉球事略ふ記件の夫婦遂ハ三男二女也。長男ハ天孫氏。これ國王の始なり。二男と諸侯の始也。琉球事略小えり。三男と百姓の始となり。事略云庶民の始也。又長女を君と稱へ。按司の始也。二女を祝くと稱ひ。もとハ天神となり。もとハ海神となり。事略云一女を女君の始也。二女を内侍の始也。始て植木。國隣のとれ。その嶋をすして浪よ漂つ。ようてたれりといふ樹の生始て植木。すやく山の體としあき。といふ草木植木。又木とし木を植く。圓の形とし。あづれども火といふものあり。ハ龍火木乞ひ。

木火土金水の五行成就せりといひ傳へり。』

日本より琉球を以て右流間の嶋といへ。千載集云。

おぼつるまの嶋の人をやや言の索をあひて顔見る。大貳三位の挾衣。右流間の嶋とゆ。下紗ふうまの嶋とル琉球。あづれてゐたれり。又本朝怪談故事云琉球神道記を以て云琉球國の王宮。榜する。龍宮城と書き。袋中の曰是を云ふとハ琉球ハ龍宮の義也。音通する。故欲。この國東南に在て。水府の内の極深の底。それハ龍宮とも。故ゆる。天龍地龍の社あり。これを天妃。りふ。天妃ハ唐山の神也。波海。今ノ異國人の菩薩。が。天妃の御をよりて夷狹なり。今ノ異國人の菩薩。これらを天妃と。船の神。云々。云々。上かれば。云々。以かれば。云々。此方。ふのく琉球のゆゑ。あひて。問詰休題かくて琉球國天孫氏。九五世の國王を。

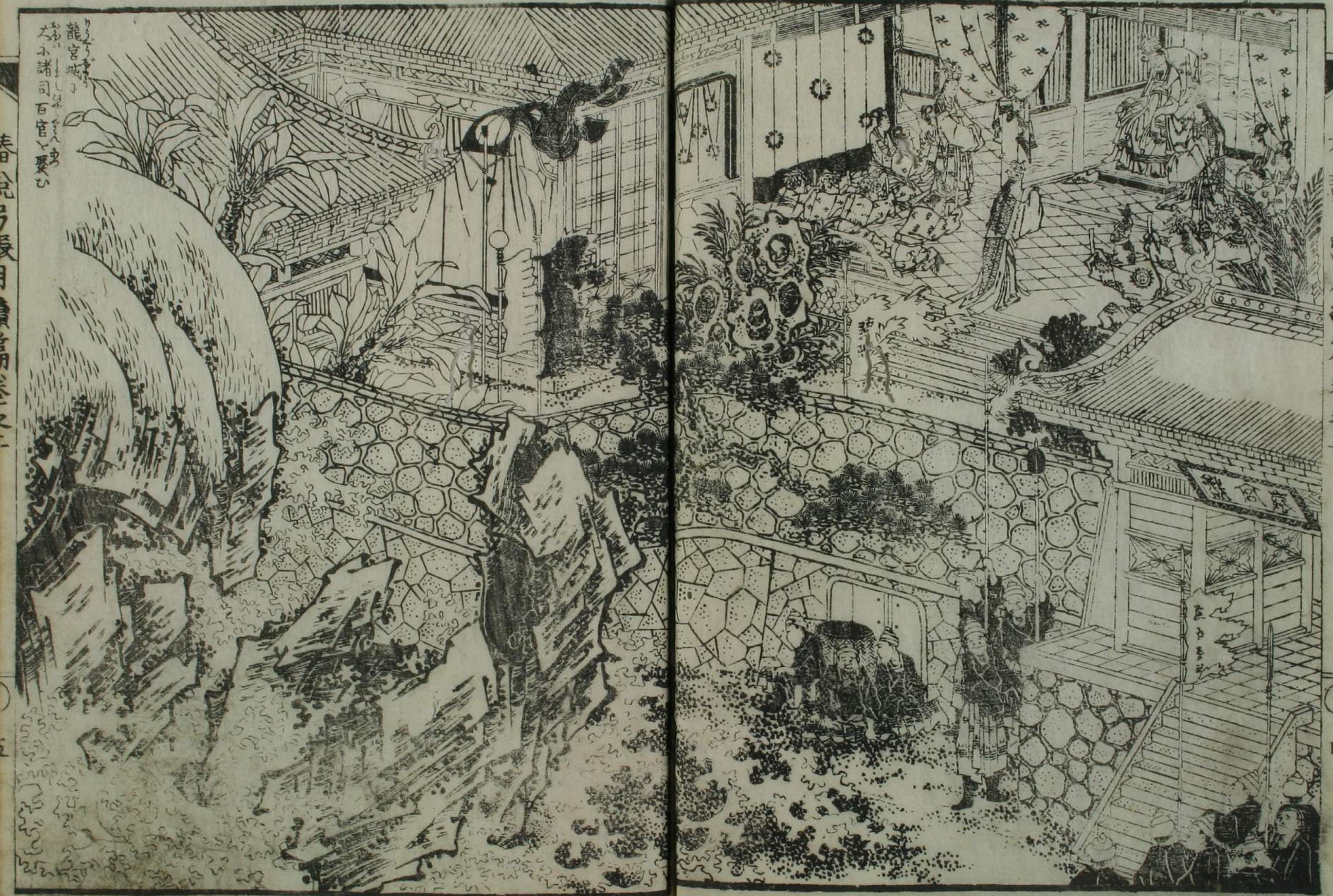
利勇
中山傳信
錄卷之三
五

尚寧王とひふ。この付君德が衰て、社稷得か傾覆んと。事の監觸をうづく。彼尚寧王才短く、慮足ふ。王妃中婦君満腹して妬みく。僕人利勇小權が執政を放ふせしふたり。しめ尚寧王國頭の按司。司馬順徳が女児を納て、王妃とせんとす。故ゆてこれを止。國相利射が女児を納とて中婦君にし。琉球少く王妃を並べ。順徳が女児を並妃。並妃の亞妃。前編集三巻小ええる。廉夫人是し。あるに中婦君へ才を世ふ勝りて。赤燕賈后の媚あり。王その色小惑觸り。内外のみ悉く。そのいふ所を用ざれり。加旗國相利射ハ近曾翁ナリ。その怪紫巾宦利勇。政ナクもトは。君を欺き民を虐。浮雲の驕を極也。天孫氏二十五世。一万七千七百八十余年の仁政忽地々廢れて。國人叛と離んと。このとん世子なくて。廉夫人の腹ふ。王女只一人出生ナリ。尚寧王も。年四十不向とせしとれ。誕生あり。

初子なとへ。これ代寧王女と名づて。鍾愛大と。天孫子世との國王。王子なとどきへ。王女小位をほくる。舊例もあれば中婦君ハ。ゆくすゑのゆをそひゆるや。好ことかびるうれど。彼廉夫人へ。よづよ慎ゆく。聊も寵をそひみて。驕慢の氣をな。毎車ふ謙遜して。中婦君を敬ふ。ふぞ憎ふ。とひふ。足をあへまに。ひひきとべたすうきて黙止。うそ。後ふ寧王女ハ成長す。隨よ頗るの倩をな。りへがま。孝公よりつゆ。勝と。その怜憫と。丈夫といふも。及ぶるゆ多ス。うそ以て。尚寧王いよ。愛慕。この王女小位をほぢや。と名ひきの後ふ寧王女。十四才ふぞなうりひね。抑琉球ノ。その國偏小にして。南北長。四十余里。東西ハ狭にして。十里小過。ぞとろん。六十町を。一里も。その都と首里と。ふる餘の郡縣と。同切と唱。その地の領主を。按司といふ。官位の品級正

未言曰。既用爲有者。之二

従にて九等あり。國相元侯ハ正一品法司ハ正二品紫巾官と從二品
と云ふ。國の大臣として三司官と稱し。又某地の親方と稱し。又耳目官
又御鎮衛也。三品謁者一名申^{セイシキ}ハ正三品謁者^{ロウガ}一名申^{セイシキ}ハ從三品
と云ふ。正三品謁者^{ロウガ}ハ正三品贊議官^{セイシキ}ハ正四品那霸官^{ナハ}ハ從四
品。察侍紀官^{サツシキ}ハ從四品^{ロウガ}那霸佐數^{ナハサス}ハ從三品^{ロウガ}當座官^{ダツサ}ハ正五品勢頭官^{セイドウ}ハ正六品親
雲上^{クモノウ}ハ正七品^{ロウガ}捉牌金^{ツヅケイシキ}ハ從七品里之子^{リノコノコ}佐^サハ從八品
筑登^{ツヅカ}之^ノハ正九品^{ロウガ}筑登之佐^{ツヅカサ}ハ從九品^{ロウガ}外紫金大夫^{ガイシキ}正議大夫^{セイギ}長吏
都通直度支官^{トウジシキ}王法宮^{ウガウ}九引宦^{クウイン}内宮^{ウチノミコト}近習^{クニシヒ}内衛^{ウチノエイ}國書院^{クノシヨン}良醫所
茶道^{チャドウ}祝長ホゆ。枚舉^{ハタハタ}小皇子^{コウノコ}かくて尚寧王^{サウネイ}ハ。ある日この諸司百
官^{クム}を龍宮城^{リウゴウジ}の正殿^{セイデン}に集合^{シテ}。琉球二顆の珠^{ツブ}を附属^{ツブスル}。
廉夫人^{ケンフム}ともふ中城の世子殿^{セイシキ}を移^シえんとやうはしをやめちとす。され
ども皆甚^シまうひゆ。が君^{カク}齡半百^{ハーフ}及^ヒびきとも。王子^ヲあしまさん。あれ
ども王女孝順^{コウシン}にして。且聰明睿智^{リョウメイ}なり。これお位^ヲ付^スまさんへ。民の望
とく^ヲ叶^ヒして。國の幸甚^シ。夫中城の間切^ハ世^ノの王子の采地^{アシチ}あり。世子ハ
かく^シば彼处^ヲ移^シ往^くと^リて。サ^ム中城殿^ヲと稱^ス。今日ハ是福星貴人
の吉日なり。常言^ハ甲丙相邀^ス入^ル虎御^ヲ。更逢^ス漏位^ヲ最高強^ト。速^シ中
定^シりて。と祝^ハせ^カかへ。尚寧王大^ハ小^ハ歎^ヒい。がて里之子^ヲとりて。
中婦君^ヲ寧王女^ヲ廉夫人^ヲ迎^ス。緯^ヲ速^シく除^ス。而^ハ中^ノ陳^ヲ
匣^ヲ捧^ハりて。王女^ヲ授^ハんとしきふみそ。中婦君^ヲ驚^カ。そと注目^{アリ}
あふ。紫巾官利勇^ヲ下^カ班^ヲもくと出^ス殿^下をり。小臣^ゲり。うじふみそ^ヲ安
き。往古天孫氏^の國を國^{ナシ}ひより以來。年^ハ一万七千七百八十餘
年^ハ及^ヒび。御代^ハ五五の今^ヲ傳^ヘまふ。王子^モいも^レば。王女^モ讓^ス
位^ヲまふ。古くよりいふのとみそ。近き世^{アリ}その例^ヲす^カと。こと^一。



殿下も元年五十ふ及せまへども。今は壯健ありえあり。加之中婦君。未三十の如く。年々過る。男子ハ八十六にして陽道。女子ハ七七四十九。隕道。故老。子が生れのをあらわす。あれば。のち。皇子誕生。はしまさ。ともかく定めに。これニ。王女天性。怜愍。もうせども。女流なり。世の常言。才女の置きたまへよう。愚夫の黙り。あれと。つぶ王百年の後。王女のみ國を御す。大臣政を放逐し。君の威徳衰え。それニ。このことの可い。これをりて。吉凶。いふとある。讓禪授受。國の大事。危存亡。この一舉。小めりて。禍蕭牆の下。起らん。欲よと。聖慮をやがらされ。どうりや。と言語を巧に。とぞ。ふ。みみその權威。や怕れ。送ふ面をあひて。ゆるび言を。生とのほ。うふ至る。尚寧王へ。忽地。よろひ。思ひ。且く沈吟。あくべ。いうして。ようさんと。向す。利勇。答て。愚案。成りて。すうさんよ。世子。定め。あらわす。ほくと。王子誕生。はま。徳長。大臣と女婿にして。國を讓まん。こそ。長久の計。今日の。や。ひとひと。まくじ。としあそ。爲体。傷ふ人なぬが。時。み在邊の。珍。を。そと。出。声を。勵。君王。い。う。と。ハ。利勇。が。巧言。小惑。されて。國の。大。を。恨。う。と。ら。あ。の。あ。り。と。衆人驚。まく。これを見。ひと。そ。の。人。年紀。ハ。二十。有餘。して。き。白く眉。秀眼。そ。鷺鳳。の。口。ハ。真朱。の。声。ハ。巨鐘。と。似。ふ。金。の。替。と。紫綾の官帽。を。戴。身。衣。深青。色。の。袍。を。被。龍蟠。の。紋。黄。う。帶。が。結。う。この。人。つ。これ。前國相。毛公。が。子。國頭。の。據司。司馬。順德。姫。う。う。け。中城。の。按司。毛公。が。子。國頭。の。據司。司馬。順德。す。利勇。三。菌。絛。の。不。可。と。述。う。世子。を。定め。う。み。が。阻。じ。の。言理。

あれふ似く理よ稱つも。王子はしきとて附へ住を女子よけき。近き世よ例きしとて。これを止まふ。そるとどうべゑりて。坐とこうと車。上古の名政を廢く。先王の法則ふ憚きふあとひや。これ一つ。今より後。王子誕生あとくらうとて。首斬してみと決一のをもる。信天翁といふ。もの居うち食と待ふ似く。ひとあはつゝは。王女中城よきすの。王子降誕はさとば。王ハ佐を王姫よ伴へ。王女ハ又佐と。おひ子ふゆくまひえ。國祚坐えの基。されふ子ひみやあれ。これニ。この國の習俗。貴も賤。たも。女子ハ十五歳より。墨を頭ふ龍蛇の形を花彌。を。ひじよ。よかとね習俗もとく。咲くのめりとしくも。國の制ひれば。ふすもそぞみうじよ。王女十二才の春。ふくこのみを數。腕折丸折して。天神地祇小祈。遂ふ王よ笑えあげて。既よ花彌するをと禁指の節の本。針を刺。爪の隠す。あき條を入りて教。龍蛇の役を換。まひく。貲ふも思ふも。便宜がひくと放びて。王女の恩徳を仰。がれがれしほの清こう。すうから民の父母となりきふ足り。これ。え。みの善をぐれあひて。群臣もえて不可とまうじめがな。利勇が一言よ躊躇。めふるりうと憚る。手を冷らす。ちがん。人の及ぶ所にして。當然理ふ。利勇もこれと争ひがくや。おぎひ。く。阿容もと圓にそ。尚寧王ハ情由がてすくにとひ。も。きくとらへて。ゆくび珠の箱を捧合して。王女よ對ひ。これ。是。が。祖王天孫氏の國を用き。ひとて虫を伐。民の害除。き。の腮と裂くひ。兩顆の珠し。それへその一顆を疏と。み。づ。又一顆を球と名づ。灰ふ圓。唐士ふは國の玉金あり。又

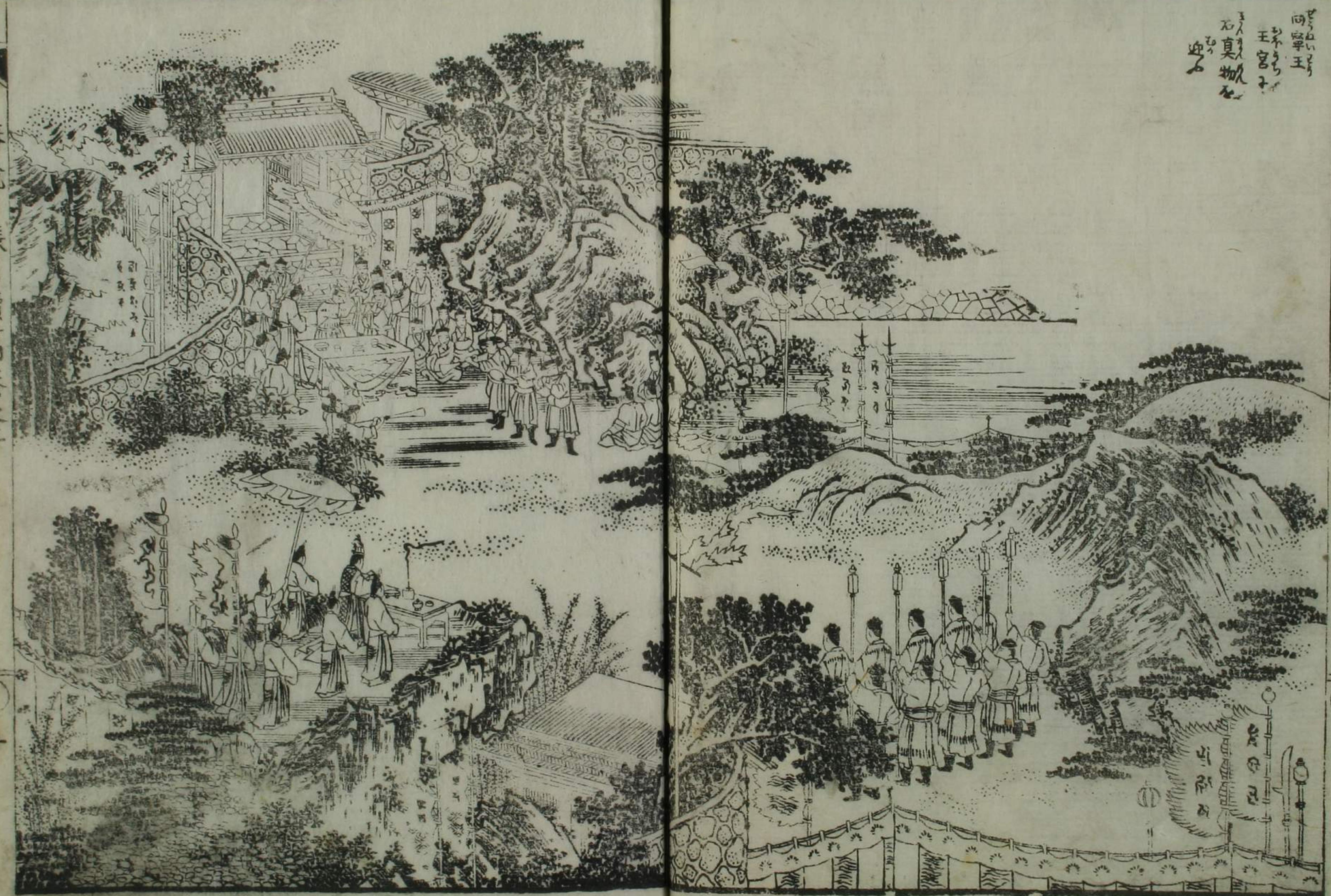
日本ふハ琉球の人今キそつぶ國とせまうとくほびてる。致モ三種の神器めうて世の天皇相付をとりえり。又この珠も。その類也て。いと貴ひごと神宝ふこそ。今よりこれを御身ふ附属モ廉夫人とももに中城の世子殿は佐きかべ。と叮寧ふ説示て件の際を王女よ遙かし。又毛圓卿を通じ。御彼地の按司されば。今日より王女が傳とれ。ともかくも教導す。と仰り。毛圓卿多く教び君王上ふ在を。微臣が直言を納あふと。寔ふ國の幸也。ととうやをまれへ。皆りもふ万歳を。祝き唱り。その中ふ利勇の。若とくすて中婦君と目とえあひ。王女が諫を用ひたり。後ふもひゆうりありあひ。と嗟きぬかて。寧王女が吉日かトと。彼殊とぞ。廉夫人とももに中城の別殿に移り。役人。丈官武官内侍官贈ホ。ひらく中城殿王女。ふくあり冊。

毛圓^{モク}毎日^{まいにち}小出仕^{こし}。邦家の治乱^{くわん}君臣の得失^{とくし}を物語^{ものがたり}する
事^{こと}。王女^{おとめ}もまた^{まことに}おのれを責^{せむ}。身の行い^{みのうい}を慎^{まつ}まふ。かくて^{かくて}は
尚寧王^{じょうねいのう}も、中城^{なかじ}を起^{おき}たゞ。終日^{しゆにち}ねむべく。王女^{おとめ}の孝心^{こうじん}等^{おのな}
をうがゑ^{うがゑ}を致^{さなげ}ひまづ。中婦^{ちゅふ}君^{くみ}。いよいよ^{いよいよ}憤^{おこ}り迫^{おど}る^{おどる}。まことに
きあんあくわきば。竊^そよ利勇^{りゆう}と示^{あらわ}す。よう^わ廉夫人^{れんぶつじん}を結果^{ごくわ}。
王女^{おとめ}をやうしなりんとて、とよよかくよま胸^{むね}との苦^{くる}。いよいよ^{いよいよ}の
便^{びん}をひきしふ。次の年^{とし}の春^{はる}より。あぐ^{あぐ}水神山神出現^{あらわ}し。海山一度ふ
荒れて。渕戸農家^{おひちのう}せつくりれづれをうじうひぬ。こゝ君真物^{まこと}の怒^{いの}
せあふこそ。向切^{むか}くの里人^{さとびと}。毛圓^{モク}の冥場^{めいじょう}へまづくし。处^{ところ}の軒林^{けんりん}の階^{はし}で。
笛^笛を吹^ふ大鼓^{だいこ}を鳴^ならし。よし。ふかあり慰^{まし}と。とえてその諒^{うなづ}る
アマグ^{アマグ}。大約琉球^{りゅうきゅう}國^{くに}ふ四^よつの冥場^{めいじょう}。やいざ^{やいざ}。アマグ^{アマグ}。山南省^{さんな}の玉城^{タマシ}都^とより

南の方へ。この處へ天孫氏。虬の腮を裂いて。珠を取る處也。よりて王城。
一里半。第二山南省の豊見城。この地雲城ふ雪の壇也。毎年
祭り。第三山南省の北谷。いにしへ天孫氏。虬
を殺せり。とこうふして海邊し。第四中山省の高嶺。一名。舊
虬山といふ。天孫氏。虬を殺す。その骨。此の山ふうべし。とりふ。今
なむ。虬塚あり。玉城。豊見城も。首里の都より南よ當り。舊虬山
へ。西南ふ當て。ものく相あること三四里ふ過。これを四萬。ヨリ。地と
称す。さて琉球國へ道次の大木。大石。とくとく。これを神に崇
祀す。群衆に君眞物をさる信と。彼君眞物と称する神。開闢以来
國の守護神也。その神。小陰陽也。天より降る火。からいをいのえん
えんと。浦より上りて。ちやつうちらぐのまんえといふ。一書。

ふをくみえり。み神をくく出現。託女不託宣とて。奴の拜林より理
メトあるせり。み神をくく出現。託女不託宣とて。奴の拜林より理
スカ託女三十人。多く王家にして。王妃もその一人也。されば則日本あり
いゆく内親王。と齋宮として。宗廟へ有りしより。多く餘園中の
託女。その数をあらび。亦女王といふ神めり。圓王の姉妹也。袖に告
ふ依てこれふ替り。五穀成るところよ乃く。此神女園中が遍歷。稻
穂を取てこれを嚼。しりぞ女王の嘗。ざれまへ。小獲入る。稻が食ふ
とて。ハ立地小死を。こゝべりて。多々稻盜人。ひ。又夏子陽が使
ひ。やぢ。其が五難姐よ載て詳く。又彼君。其の物。り。怒る。す。あると矣。
國人腕折丸折とて。自潔す。ゆのをして。これをね。三慰す。ゆいと
切る。又七年。小一回。出現のゆ。神めりて。園中がまく。三十六の萬嵩生。そ
えて。そぞて一時。出現在する。これをみて。さうと

向寧王
王宮子
石真物也
迎



君

真

物

神

像



稱く。上國王より下民ふひるまで。がれここ祭るのみよ。まん。その神の出でた
まへ。小年八九月のひめをうといひよりのあづみれ。壁言ば。この説。五と
鮮明う。種くの莊嚴と。その山を覆ひ竭も。因く。その
山をあそり。獄と。し。神の出現。近を。ゆうとて待ち。果して。ま
十月。至つて。件の荒神出現。と。そのと。託女と。王の臣下。かく。鼓
をうち。歌。歌ひ。してこれを迎。引く。王宮の庭上。至る。傘。二十本。錦
が建く。神の行宮。と。ある。傘に大小あり。大に。サナハ。高サセハ丈其
輪十尋。ふゆき。ちひ。と。り。ど。も。高一二丈。輪ハ。これ。ふ准。と。又。山
の神のゆづり。ことあり。その數。或。之。繫く。或。少く。年。よ。う。数
定。え。し。人。回。ゆく。彼。山の神。を。え。う。ふ。その。相。負。い。暎。曉。と。して。定。り。
ら。あ。ど。衣。裳。ハ。袖。の。長。さ。被。あ。う。が。その。衣。裳。立。地。ふ。変。じ。そ。あ。ひ。れ

錦繡のとく。或へ麻衣のとく。件の山の神。ゆくの童。城に従へ。この名を二郎五郎と呼ぶ。これらが衣裳は日本の製衣ふるしく。小袖と袴なり。山の神怒る所ありて。童は鞭つとあれば。童の鳴声犬の如し。又あらまき。一書ふある。といふ海神のゆづり所あり。その神の身丈一丈あまりにて。畢竟れ御子大ゆきあり。よりて祀を結びて肩並掛く。これら神が。さゞく君眞物と稱す。是もうとて淳じる物語ふる。日本僧。彼國ふゆりたれ日。正しくそぞるよ。骨董錄中。琉球事略。載られ。又五難組。謝在杭が云。中國の人琉球。不ひよ。彼は代々治危きる。親と神の出現も。うべく。もの。又声鳴として。蚊の如く。りり。かく奇いたる。あくどく。五穀を傷ひ。国人を害する。まう。まう。まう。是年山の神。水神。荒と晦て。海山の掉了。その便に。うしう。樵夫渢翁。おもてうち歎くよ。そのえあり。れハ中婦君ゆく。故び。鶴小行勇と示あひして。腹心の外の所。廻の間切ふ遣し。國王忠臣の諫を聽ありて。寧王女を中城へ移す。世子立す。ゆき。君眞物のゆき。神怒て。この禍を降し。もとぞい。せざれ。されば一大形をみて。群大戸ふ吹る。うぢしなれ。この風声。畠にして。巷。満て。かく。けり。役。尚寧王。この流言。傳せ。大不驚。俄頃。中城の按司。毛圓。持を引く。緯の趣を笑え。虚実。と公り。は。卿。何とも。されど。同。毛圓持。茶。まで。ふまる。ゆの。ゆ。これ。王女。彼。君。中城。不移り。かく。して。ひ。行ひ。慎。半矣。の。ちん。懷。か。彼。諸神。これを咎。謂。し。勢。實。と。笑。し。それと。官帽をかく。

回荅まうせへ。尚寧王まく眉を顎ら。あかりとりへども。國民ホ豊見城不至そ。拔禊。或ハ處の拜林不至て祭り慰め。これ又近曾。みづく雲城不ありしとて祈禱。その外北谷うる海神。高山領旧丸山一名。なれ虹塚。幣帛を進。もうちふ。終不寫驗。すの有ゆべし。卿ちづく退け。それゆび思念せんと宣する。モ國興ハ母理を盡。王女のうへに神の咎が宣さゆひたはしを明。やがて中城へぞ退くな。時中婦君ハ五一十を竊。簾をかまく。冷笑ひ。モ國興を目送。歟下し。曉得うか。彼モ國興を。廉夫人が後年なれば。王女小この園をキト。おのれ園相とうて威勢がふりんと計校。裏ふも言を巧に。王女が中城の世子殿。遷し。今亦舞舌がふうて。君を惑へること。ひと憎けと罵。王忙ちく見え。やがて王ゆがうち居し。賢妃のりふ所も理あり。彼がまうほ所も理あり。され暗してらひ啼や。誰うこの利害。論じて。事の吉凶を定ひ。と同。中婦君かまひて。紫巾官利勇。ハ。すのま。ま忠義ぬ。且遠ん慮め。ふとて彼が名て同。王女がうへや。とて。継母の腹をと。あうちうへ。と君ゆもぢり。人あもいれえ。そひ歎てもあまうわれど。園の為か。よひうの由え。用あふと用ひ。うへざれと。ほこころふこそあくべられ。と涙にしがまかた。は説。尚寧王。父もあへば。利勇。代召せと。左右ふ仰せて。連。かく。そりに。且して利勇。余じ。尚寧王。これをちく侍らし。毛圓。得がひひつ。の。一五一十。説あじつ。卿何とうふ。かくま。耶。回荅せよ。と仰。それハ利勇。縁由をうひまつて。数回歎息し。つ

王只一人の口は信しんじて。千万人の言を疑うそひ。理りふとひたり。あれどす
今忽地ふ世子せしを廃あきらめす。毛圓もうえん謀むらわ反そなへし。夥おほの圓人えんじんを殺ころし。謀むらわの足あしをあし。彼かれ仰あがく。殿下だい神じん慮のりあつたる者ものとと。北谷きたの長おさ阿公あこうふ同ひとく。彼かれ門公もんこうと前中山省まちゆう勝連かつれんの親方おやぢ法司ほうし阿高あこう。女め兒めのこか。幼稚ちよとと父母おやぢ喪むすび。兄弟いりあいも。先王せんわ憐れん。父おやぢの舊領きゅうりょう一いつを。あつた。それを託たく女の長おさとして。女め君みやこ小唯こゆ。世よ代しろ人ひと彼かれを。鳴なる。北谷きたの女め王おうと稱めい福ふく。禱とう禍くわ。禳らう。鎮しづ。鄉きょうの牧まき。惠めぐらす。されど。彼かれ原はら未み人ひと。嫁よめす。三十餘より人の弟子だいしを扶助ほじゆ。齡りやう既すで六ろく十じゆ。あつね。彼かれが。君みやこより。よく知しつた。べたのを。と信しのじて。生うまうり。尚寧じょうねい王おう。うち。右う手て。それ。阿公もんこうが。ゆく。忘わす。そ。使つか遣しして。回まわせよ。と。仰あがむ。利勇りゆう。うけ。物もの。され。近ちかい。臣おひし。仰あがむ。行ゆ。か。北谷きたへ。坐すわ。り。さる。徑きよ。近ちかい。臣おひし。汗馬かんば。鞭むち。鳴なる。首くび。里さとの王城おうじゆを。出で。六十町道りょうどう四里よし。が。ほど。只ただ。一晌いちしよう。乘のつて。阿公もんこう。家いえ。小こ到いた。仰あがの歎かなを。述のべ。す。阿公もんこう。豫よ。と。利勇りゆう。が。伎わざ。よ。君きみ真ま物もの。の。崇たかき。と。僕わがり。て。海山かいざんを。あ。する。と。彼かれが。爲ため。されば。と。ゆく。その。ころ。伏ふ。仰あが。うけ。あり。と。僕わがり。あ。じ。うち。按あわせ。お。り。ち。も。て。い。く。へ。ま。う。ひ。ま。う。う。し。こ。け。と。大王だいおう既すでに。神じんと。人ひととの。あ。う。み。な。が。じ。き。あ。う。天あまの。火ひ。火ひ。障さざな。と。今。これ。を。禳除らうりよ。ん。か。辰たつの。年ねん。月つき。日ひ。時とき。不ふ。生なれ。る。女めふ。を。犠ささ。として。この。海かい。小こ。投なげ。大王だいおう。さ。ぶ。戦悔せんげ。して。水伯すいぱく。を。祭慰さいい。う。み。ば。神じんの。境さへ。う。も。め。う。る。ん。ぎ。あ。う。あ。う。と。ハ。圓えん中なか荒あら廢あきらめれ。て。忌の。い。れ。大車だいしゃ。ふ。及およ。が。し。と。い。く。ま。う。近ちかい。臣おひし。これ。を。坐すわ。て。大おほ。警けい。と。又また。

馬とうら跨く。その夜看里小馳えり。阿公が勘ける縁由をうえ
ゆづる。尚寧王が呆果く。まの赤足の踏とどろをちいび。まづ中婦君
み告あふして。次の日利勇かを召集。辰の年月日時。ふせられる女
子めし。今度の孫よ進トモべ。親ゆるみ。その親よ田園が生
りて。生涯を安トうへ過じ。子ゆるみ。その子に官職を授。行ふ
まれ恩賞の手に任そぐれはし。圍中よ令ちをよと仰されば利勇
からうりまわ。中山山南山北の間切三十六の属鳴よ属託し。普く
これを索れども絶く募ふ。愈々あれども。尚寧王も。めうりふ募
みよ。有一日中婦君と。このうち詰ひ。中婦君微笑。いふ
れいたと。誰うる余のをかう。千々の黄金を家積と
も。命うしまつて。何えせん。この國ふ辰の年辰の月。辰の日辰の

時ふ。まわる女子のなれあひ、ばりれと。親ハ子がいとを。子ハ
親を喪へとて。名告も出ざれふことを。いと理よ。けれ。亡堂と。まよへや。
寧王女ハ辰の年二月辰の日。辰の附ふ。おれけりゆるを。殿下ちもあじ
類みて。おひきく。人の心をも。推て。あらう。うちられよし。と。ふ。王さればす
て。掌代機と。拍げ。おちひ。高と。王女も。今茲十五才。はして。あう。辰
の年月日時。生まれあれ。又。民の父母として。國内難よ。私せば。神もいふ
び。納受め。ん。是彼と。索ん。より。王女代機として。民の患を。禳ひまん。
されども。おねくも。おねくね。子を。うしききて。誰よ。位を。ほめへた。これ。角を
投ふ。器が忌の類なり。は。や。災代機禳ひ。國安らつ。おなづね。こも。禳
る子。なぐへ。それも。かひ。ひ。身。おも。あが。と。ちりひじて。同まへ
ば。中帰君。答へ。王女ハ。余泣。あれ子。ふ。ほ。り。あ。うせんと。宣ふ。らも。

まくおやうと助かるせん。とこそうへ。公はうし。やへざる。やへざる。
と祈侍くんや。けれど人の誠をもるはからぬ時ふ候れば。殿下試み毛
國門を召す。菌様にく小宣くんふ毛國門半島の私。王サも又
孝行の志空しかばじハ犠ふうぐんり代希ひうべ。その孝心を
神も憐れ。こづか子ふ撫ても。民を救へんとおひきふ。王の賢をほら
を。國人ホ感激せば。募募ありどとも。犠ふうぐの事あへ。あるとて
王女の足ふ悪なくて。禍立地ふ禳除た。位を傳へきふとも再崇めは
あしと。さじども。お言の御の伎俩の罷み難い。とんちくにて
尚寧王を。ほくべくうちまで。大お詫び。おがいふ所寔ふあらか。
それうごかりのよふ。おつうがりこそ。愚なれと慚愧て。只管よ嘆賞。
あがて中城ふ使ひをして。毛國門を召しき。

第三十四回

寧王女躬を棄て犠ふうぐんと談を
廉夫人妹ふ連そ更に母伏悼む

尚寧王ハ。緯の趣が。ひまつ。中城へ下えを。しまづねども。寧王女ハ。も
せの風声をうれせて。有一日廉夫人ふ宣ふす。海山の荒うみ。神の祟
うりとぞりふなれ。このやゑふ。活業のうつたが失ひつ。民の歎をもい
と痛し。父王も足のこだ。さと公苦しくもばらる。まじかくふ。まじか
網みゆふふ。爪折して。君真物を祈是とも。誠の道よ稱ねみや。とく
ぞとくぶ。驗も。あくねふ。北谷の託女阿公が勤まらせ。はとゆくふ。
年も月も日も。まみ辰よまれ合ふる女子が犠にして。水神よ進
らせよべ。世そのどすかなるべ。こすえあげしき。やうて國中よ属託
て。その女子が。よくとぞ。かれべつぶの年月。阿公がり

才 話 五 引 八 卷 二

卷之六

とこちふ。行合と。聖主へつとりて首里ふ。あり。そく經を訴え。このとき
神よ進へせすん。今霄うだりの名残ある。えすん後へともかくも。とす宮
せまへじ。どらひうけて目が拭ひきへ。廉夫人笑もあへどうら驚いた。ハ
らひもうけぬ。金の枝玉のころよ。世をもあじ。有べた中城のむんが
みて。ようや圓の為しとて。儀としきりえ。と宣ふても。これを許さうれ
や。からんるゆへ。戯どくしも宣ふ。まくねどく侵入ぢトが眼を睡耳伏
側つ。中婦君も告んとて。隙を窺ひたるやの狀。ひと不覚も。と諫いが。
寧王女がひて。いみ。そぞくの人のうへふ。忍ふしふも。女を公より外不
あふくしく。人ふむとしやらう宿世ありえ。況く世を従。位代嗣がば。
よろが影護も。傷ひくふうべ。惣中城よ遷られて。嫌忌の中ふ
世伏食う。高た樹の風よ折らうべ忘却せん。ふ志ぶゆくべ。おを
殺して仁をなし。國民を救うべ。神も憐え人も喜び。その應報空一木。ビ
て。王子誕生ゆく。よくなれ圓の洪福也。イ王子誕生ゆく。も。王
孫出して。臣下ふつゝなれり。なきゆしも竹。そのひとり二人とい
へ。清家が亡父司馬順徳。それが親族のモ圓鼎うんと。こな天孫氏は子
孫うへば。これふが子。そもが養ひて。位を傳すふくも。その院をひとつ
形う。他の邦ふれ子ふ。徳を。徳ある人ふ。讓りう。聖の世とて後生くも。いと
病て墓がくる。うへば。どうやらうとすもいふせん。何ゆも圓の為し
とおひ涕めまへじ。とおもろひ絶けり。とひ慰めすかみ。廉夫人
を誠す。この言のまを笑ふ。胸うちりゆゆきがりつ。宣ふ所理
けれど。又みまわもなりて。ほれんせよ。とが父司馬順徳。王女の誕生

司馬
卿死
其妻
章氏

赤子を抱て
宣野湾へ
脱る



司馬順徳
が王を代り
て九人と新
にしの中山
信録を
そぞうす
と先後を
と先後を

生しりと年ふ。ひきのうとさく。ふみとしめ。ゆきとまふ。
おひとせとあまう。五年前の秋のとく。君王ひく病うしてかん命危
うしほ。順徳ふくろんを歎へ。君眞物ふ祈誓して。おみをりく王
み代て死んとねぐ願みの誠忠を神も憐みてや。王の病愈みひと。
あつねふ僕人をく。竊ふその幣帛に血と塗釘を打。司馬順徳こそ。
物棒をくも君王を調伏。おのれこの國を押領せんと。逸者の舌の
剣の鋭く。王のひこう鈍されば。これを審事にして。縁故を正したまふ。
かて討手と向られまう。されば可惜忠臣も。おのれ衣はへてモ家
ふ火を放。順徳の腹うち切く失ふられば。主ふ苏らぬ家隸節黨に
ちくはしうえ煙の中よ死するもあり。ふむられて生拘され首と刎らき
ものあり。母の父が後妻をて。ふるふれ継へりと。ふざま權くしく。
率して當歳なる。味真鷄をうた抱き。後門よう走り出。往方志とど
きりぬとも。又猛火の中小走り入る。親子三人。ひく煙と立冲ぬとも
せえ。走ろう。そのとたつぶさも父の罪不よみて。宮中滅追る
べくしふ王女胎内みおひよして。既も臨月すよびて。その制度ニ
及ばれど。只王妃よ立ちけんと止られ。利氏を納て中婦君と
も。こんご利勇叔侄が所行より。とあれども女子の悲しきへ明白
ふれいほしも。とえて汀の独木船。むとううとこ。國頭の宇郎乃
濱の小夜御形をと。身を泣む。歌樂ふり他人娶り。艱難ふり親戚
離ると。世の世言ふりくもうぐすり父順徳討れ。後ハ從弟うりう
毛圓舟のミ外よちからへられたるのとく。針の姫小波そるがでく。姫
中ふいく徑よく。王女が産をりしが。王もすうやくに曉ゆ。おひえ順徳

伏討せしる。後悔の意氣をええて。まか身が憐しき少しそ
憂愁を慰めり。王女の成長をうみを。まうひめて世子と仰されまへぞ
か代百姓代々後祝ふ十数年の元の令を化して民を赦んと宣ふれ。か
仁公へることねがら。その臣下のうへこそわれ。國の名ふ躬と愛する
を。賢れ君とまうひし。はしなてすむ宣ひそと言語を盡してとどじ
とば。王女孰ゆ果て歎息し。朝かられて夕ふ死を蝶蝶とらふ生も。
命の惜むともくのを。親の歎きもかくアス。せの護の國を棄
王位を棄て只管ふ死んとねぶふやうねど。かとされど父王ハ達
者の中うひを実言にして。人を疑ひまくやう。とむよつて此度
特よなうじのを募あふ。その人をひもとせ。吾脅をこそ。とかがさ
ひとも。利勇ホガヤシモトセ。不思議の仰ある。ごとも量がし。そよとれ
固辞もある。ともさへとて許さうや。ほし又別ふその人ありとも。罪
かたのび殺さん。みのオ小搞く。ひと痛生。異國のいふへ老
たる親を野ふも棄山ゆも棄。例あり。とまくへ冥。欲是へ又され
も芳くな神慮。入をりて飛よ定る。國俗こそ悲一けれど夫來あらく且
くもやぶらがとて。有為將變の理ア。去てふくびゆうざる。冥土黄
泉の別。も愛惜哀慕の悲。ミ入テよじらぬ。されど本の露
未の雪下。先づつも後うも。別とひり。おみじか。乍らいきへと
いへつ。立あがんにまく袖を。廉夫人引とぶらて。これら物をやむひふ。
君の仰あが。是非ふ及が。がく。求めて牛馬。おを比一。まゆう
。ひと送ふ凍り凍られ。緯果。しなれ折。もあれ。按司毛圓。嘆いて。郡の方
より繞て入り。欄干のあよ。半揖をして。翠簾のはとうみ路。踞。

も。すこしすくの事。あらまく國民を救んど宣ふ。中城殿の臣仁ひふうた。又理人速く
禁めまく。廉夫人の恩義重たいづれをいづれと云たがれた。一五一十も彼
心ふて空鍋せし。不差ふ感涙を拭ひあへぞり。抑今度阿公が勤ま
せ。緯の姫を按ざるよ。こゝ詭の計策ふて。彼が如何り出るか。あらま
ば。こゝ王女をうしゆひあらんと計校悪人びづがいりせりなる。もうおみ
け。今朝一も君王小臣を首里の王宮ふるにして。潛に仰つるすあり。のみ更
べつぎ別義みあふ。近曾日普く圓中代募ふ。犠よなまへサ子は。王女
の吟削み。し彼小圓く。そろ人を定めよ。されふ干只。かどりの愛父子
なれば。いと不便みこと。と宣ひ。これ全く。王女えづく犠ふより。危
窮を救へと仰さへ。詰じと措せし。うけあひ。とや果く。退ぬひ
が。と。ひづくも果ぬ。小廉夫人ハ声を惜モ。よりと泣く。轉輾こぐく。ひ
かト。ぬ。人のうろつ。悪人びづが伎俩とあつ。一言も疎。あら。内客
所容と退出。利勇カホ。相語れて。ウ中婦君のあそび。く。て。ウ君も
君なり。ゆく。あふ。ドシ。も。う。り。の。あ。り。も。國ふ一人の世子。かほ。し。う。に
あり死ねし。と宣ひ。も。こ。そ。理え。されう。ひ。した。ハ君の。ひ。う。り。ひ
ぐ。ひ。な。た。ハ毛圓。世。阿。公。が。効。き。う。せ。し。生。れ。年。ふ。ハ。令。ど。とも。こ。う。君を
機。ふ。進。く。せ。よ。と。う。人。も。く。も。う。れ。口。説。歎。き。体。す。れ。涙。の。瀧。の。ひ。う。
え。ん。望。う。き。王女ハ慰め。う。され。ハ。こ。そ。を。名。ひ。く。こ。と。よ。と。う。これ。過。世。の。惡。業。う。も。く。
を。み。う。ト。み。ち。ひ。そ。と。脊。う。い。樹。と。咳。入。り。て。あ。と。し。回。答。ハ。な。う。り。き。毛圓。背。ハ。この。形。勢。も。も。驗。そ。膝。を。こ。そ。め。て。声。代。細。う。し。こ。う。う。は
や。ま。れ。て。ハ。驚。た。う。も。理。う。機。よ。臨。こ。変。よ。驚。ト。這。奴。お。が。伎。俩。の。う。
が。か。く。謀。ゆ。り。縦。王。女。お。づ。ら。機。み。う。ん。と。北。谷。ふ。卦。た。ま。く。も。そ。も。

毛國母かゝりへ。あん身ふ恙あり。べうひゆひと。あんしごれも危き
に臨む。をもんと。ふか苦くとも折ら。そつはも犠とおもんと
生うじ。女子をねくありて。こやくと吸うて。外画をさし招け。や
をいといへて花園の諸折戸を押ひと走り入つ。孫廬の縁よりと
かけ伸よる。賤女みくら容止ハ磨ク。清た玉ぞ巻く。芭蕉布の軍衣
を。裾短ふ引折て。寐衣の帶結び。脊小眉すら藁裏の輕に打
わらあはまう。扮も愛敬づた。年ハ二五の月の眉令る花をうねがごと。當下
毛國母ハ。王女廉夫人おまうにす。はだせよ。彼ハ宣野湾の山里エ。是
宴へて母が養ひ。芭蕉布織て生活とアモリのうるが忘け。是
王女と同庚也して。あとも三月。辰の日辰の付。ゆくとぞ。うて。是
賣り。残ふうとて。小臣ハ家を出づる途中。これと浦添山の麓山

いきあひ。情由とみて。直ふねくまうね。やよ小女。汝が素生代審ふ
まうせとうと。そがせハ少女ハ臆せ。氣色も。かく。藁裏と押戸
。位牌ニ。とくと。縁類ふうべ居名告。まうじも恥へし。され
ど。コトハ圓頭の按司。司馬順徳が女児少て。真跡と。多れ。けり。
父村と。頃ハ纏緋の中。ゆめしう。何うたる。辨。けり。し
物ふそばら。養育をして。ちを木の高。恩惠と亡父の冤枉
の縁由。やくに悲しく。朽をした。宣野湾ふらつた山住ひ跡と埋め
名を匿し。世ふあるか。も新城親子。くく具志川ふ袖。し
泣あせし。行。母章の姫。あま。母章氏。しまよせ。とあこ。とあ
泣あせし。行。母章の姫。あま。母章氏。しまよせ。とあこ。とあ

毛圓興

寧王女
康夫人

真鶴を

見

月影圖



うち卧そり。反哺の孝も貧しき家へ意ふ仕せぬサボの價。前段し詠る
艱難。同慰する友もなく。娘君ひとりめりとんヤメ。都の花よ鄙の月。
墨。うらがらなれ。身と恥。風の便もよすがゆく。まつじとのこかくひだ。
さるふ今度大王より。辰の年月日時よせられ。女子あど。犠よ進へせよ
と圓中ふ令あびして。普く募きへども。あるのえし。う。王女えびう。
もん躬み捨て。犠ふなきよと風声を。が母これをすて。大よ驚馬にさむ。
あら廉夫人懷胎。あて後。の添生へ臨月。うはと。うす圆。方
辰の日辰の財。ふ王女誕生。ましくけや。や圓の爲こと。世子のひ躬
を捨て。特となり。すとへ誠。かくねふうれど悪人。やうがヤ。う。め
て。かく不思議の制度。あく。うふせん母子。忠義よ命を隕して。尊
の汚名を雪ひ。づれへこの辱。今こそあれ。ひ。身も圓頭の接司司馬
順徳。ねーの女兒。う。事に。脇。の。朽。そ。に。舉止。そ。氏。も。云。肩。ふ。不及。
て笑ひ。れ。う。廉夫人。ハ。あ。身。が。死。う。う。が。爲。か。死。理。あ。ふ。じ。
王女。ハ。身。う。そ。ほ。し。り。せ。ど。も。世。ひ。あ。く。外。戚。の。稱。を。の。汚。を。ビ。か。れ
母。う。志。を。も。り。ひ。ち。し。て。此。度。の。犠。ふ。あ。り。も。き。て。親。族。モ。接。司。ニ。名。告。め。し。
ハ。因。民。い。と。く。重。し。と。中。城。モ。あ。り。も。き。て。親。族。モ。接。司。ニ。名。告。め。し。
短。力。と。剛。と。引。抜。る。自。害。と。失。う。ひ。し。母。の。最。期。ふ。凜。ら。れ。泣。も
泣。も。わ。一。世。の。別。よ。い。と。涙。ふ。う。れ。作。の。よ。う。れ。公。を。鬼。よ。う。こ。う。レ。ス
亡。骸。を。煙。と。さ。して。立。の。ば。浦。添。山。も。う。ら。しく。世。ふ。ハ。安。波。茶。の。里
山。者。も。う。



遠れ歎きへ今も普向山。とくに旅ぐれ枚港。すれど伊祖村の
あまこふさんゆる姑場嶽。それやまがおの死出の山婆はま冥土の中城。漸
尋するよししむ足へこれ父の位牌。それへ又母の位牌。親子三人が切うる頃
命ぢられ、亡父の忠義死してにじましわ。とちひ定め物がえ。長た秋
を絞り。廉夫人へやく毎ふくん拭へともももく落る千行の涙拂ひて。
ああよさんと身を殺し。子と諫る母親の巣期を今もえぞ心地。そ
轉ひ生つ二つの位牌を袖か抱かず亦あじ役入ぞう歎きしき。やうす
小涙を拭ひ。嘯あひ。それこそへづるが好。又恐くも見しるハ王女みく
在そなれ。そもそも父ハ世ふ稀なる忠臣。されど過世やへて諫者の舌
の劍ふて討ともし。あうちハ母の往方。も妹のゆも。じひ出されぬ九重の
國津都ふ給ゆ人の奴。お水鳥の浮沫よ待ふ。爰ふ
さふ。高う隙ひまろし。逢ふねあひひへ散う。母の巣期をなづく
まは歎き。休停と袖の酒障く涌る。今度の難義。產むり。姫ひふふ
代らんといふ人のへ。母か理ゆる財あり。とてもかくても安う。わ。母の
駒も勇難く。かみし道みそ踏迷ふ。強面の命。そりへ。うくくヌ
うと泣べ。苦難へ堪ふ走り登り。登りんとして身を恥。登りもえせと伸
あ。そん奴君もそちをせし。慘害なれん顔だ。そりよされく年。身の
志へ致した。命さへれふくありつ。まの脇ふねをそくとそく不覺ふ
歎き。まきゆく。情ひと怨ぞれ。寧玉女は是彼の公のうちとど
や。感涙とぶやのへまのと。われのばせよと仰され。毛國典
あり。がて毛勝が身を撫て。ほとり近くにてあり。玉女などと
商して。捕ひもそろひ。親子が忠孝。けふ順徳が妻も子なり。かく

本草綱目別序

有きれた孝女を殺さば。ひうどく神の受納ゆゑん。志へ賞をうむあきら
めれど。是をも忍びべく。人をしてこゝろ獸よりそんぞと歎れ。
諭よりへ。まつるあふるへ面正く。これ仰ともぞ。かくせふもひ故くば。
りうれの時あ。父が汚名孤雲も候べた。されば生の豫が命は。君と親
くよ近く。くるば。笑食とけられねへ。がんに公なみたお仰く。されもあき
ぎや。と回答つ。娘のきくがえんえど。廉夫人卓既て。健氣とまの筋。
忠と孝とふれと。屠る世も比うれ少女。と。譽もらす。薄命。貧乏。家
小母を養ひ。と。長年。春やもあらど。令はるが。ふ散る花の。おれる
果の痛。と。代らす。これよもあ。ねへいく回數。とてもそのかひる
されど。今。環會喜。らふ。聖の別をちひすれて。ゆく胸苦し。とかい持
る。腕もちづかなげ。それば。と。寧玉女。なほこれを許。まうだ。
まよぐに諭。まく。毛圓對す。まきて。王女も夫人も。ひく安く。あく
きれよ。まわら。がりて。犠と。まく。小臣。そくらふべた。やうあれば。命を陥
まくる。みゆいじ。一旦。彼が忠孝と。サえあ。父順徳が冤枉を。まじとれ
てもん。敵を蒙らせん。為ふ。假よ。犠か。進ふ。も。の。彼せの中ひろくなうく
この中城殿。不給ゆ。まうべ。生親雲上。親雲上。ま。ま。りて。よ。た。は。衛ふ
ひもえん。の。の。も。小臣。ふ。うち。ま。じ。と。て。ひと。頼。と。ま。じ。しけり。

椿說弓張月續編卷之二畢

官も所へ書り
讀者所書アラタニに賜へ
李慎

